



小特集①

朴槿惠大統領と崔順実ゲート問題に垣間見える宗教問題

はじめに

朴槿惠大統領の友人女性、崔順実チェスンシル氏の国政介入、機密資料を漏洩していた問題などで韓国社会は大揺れとなった。

「崔順実ゲート」と呼ばれるスキャンダルは、2016年10月24日、中央日報系のテレビ局JTBCが崔氏のものとするパソコンから大統領の演説草稿を発見したと報じたことから始まった。それを受け、25日には朴大統領が記者会見を開き、機密文書流出を認めて謝罪した。11月3日に崔氏は職権乱用の共犯と詐欺未遂の疑いで逮捕された（読売11/4ほか）。崔氏が私物化したとされる二つの財団の設立の際に資金提供を財界に強要した疑いなど、一連の疑惑に朴氏がどこまで関与したかが焦点となっている。朴氏は4日に談話を発表し、検察の捜査を受け入れる考えを明らかにした（朝日11/5ほか）。その後、崔氏の国政介入事件の解明は未だに続いており、朴氏が条件付きながら任期満了前に辞任する意思を表明する事態となっている。

この事件によって国民の怒りは爆発した。世論調査専門会社の韓国ギャラップが11月25日に発表した調査結果によると、朴氏の支持率が4%となり、19～29歳と30代の支持率はともにゼロを記録、不支持率は過去最悪の93%に上った（産経11/26）。ソウルを中心に釜山・光州など各地では朴氏の退陣を要求する大規模デモが行われた。ソウル中心部で10月29日、11月5日と毎週土曜日に抗議集会が開かれ、11月12日の3度目のデモには最大野党の民主党、第2野党の国民の党の指導部や国会議員らが初めて参加した。ソウル市内庁舎前広場での集会後、日没とともに群衆は灯をともしたろうそくを手にして「朴政権は下野しろ」「主権者は私たちだ」と叫びながらデモ行進した。検察推計で26万人というが、主催者はデモの規模は100万人と発表した。韓国メディアは1987年の民主化以降、最大規模だと伝えている（読売11/13ほか）。

大統領の演説などに助言していた「陰の実力者」とされる崔氏は、1956年生まれの女性で、朴氏とは40年来の親しい友人であり、1952年生まれの朴氏を「お姉さん」と呼んでいるという。この出来事に関して、朴氏を支えてきたとされる崔氏、崔氏の父親である崔太敏チュエテミン氏にある宗教との関連が取りざたされ、そのことが疑惑をさらに複雑なものにしている。ここでは、一連の報道のなかから宗教界の反応と宗教に関わる記事を中心にまとめる。なお、日本で報じられていない部分について一部韓国の報道を参照した。韓国の新聞名は「」で括った。

1. 宗教界の反応

韓国教会言論会は10月26日に論評を発表した。プロテスタント界を代弁する役割をしている教会言論会が論評を出すに至ったのは、崔順実ゲートと関連し、父親の崔太敏牧師が連日取り上げられていることに、正統プロテスタント界から不満が爆発する寸前となったためである。論評では崔太敏氏は1945年4月、大韓イエス教長老会総合総会を通して牧師という呼称を得たとされるが、このような教団は存在せず、彼が神学校で神学教育を受けたこともないと主張した。さらに牧師の資格もない人に牧師という呼称を使うのは「正統教団の聖職者に対する冒涇だ、これから使わないでほしい」と述べた（「朝鮮日報」10月28日付）。

11月7日には光州で、同教区の司祭らがミサを司式し、大統領の退陣を求めた。オク司教は国家のために祈るミサをささげた後、カトリック信者およそ1千人を率いて同市内の「5月18日広場」までデモ行進した（カトリック11/27）。

「基督教連合新聞」（12月9日付）によると、12月9日、午後3時に国会で本会議を開き、朴大統領に対する弾劾訴追案が議員定数300人のうち、賛成234、反対56人、棄権2人、無効7人で可決された。弾劾結果が出た直後、韓国教会連合がいち早く論評を発表した。「朴大統領の弾劾理由は国民が付与した信任を裏切った憲法違反、民主主義原理違反である。しかし大統領の権限を国会が合法的に中止させることは史上初の事態であり、これは大統領という一人の人間のみならず、国民すべてに忘れられない傷を与えた不幸なことだ」と評した。また国会に対して、憲法裁判所の判決が出るまで与野党を問わず、この混乱した政局を收拾し、国会本来の役割をしてほしいと期待を込めた。

11月1日、曹溪宗の大韓佛教総本山曹溪寺の正面にある一柱門の前で、実践佛教全国僧家会など30の仏教系社会団体が構成された「佛教団体共同行動」が集まり、記者会見を行った。仏教環境連帯、仏教社会研究所、参与佛教在家連帯など主要な仏教界団体が参加し、秘線実勢（隠れた実勢力）が権力を振るうという史上初の国政壟断事態に対する徹底的な真相究明を要求した。12日には光化門広場で行われる市民大行進にも参加し、国民と一緒に政府の自省を求める方針であることを明らかにした。

(BBS ニュース <http://news.bbsi.co.kr/news/articleView.html?idxno=784535>)

オンライン版の「現代佛教新聞」（10月29日付）によると、仏教界にも朴大統領の下野を要求する世論が起きている。民主主義仏子会は10月28日に崔氏国政介入という一連の事態に対する政府の責任を問い、朴大統領はこれ以上国家と民族を苦しめないで退陣して法の審判を待つべきだと叱責した。

(<http://www.hyunbulnews.com/news/articleView.html?idxno=289158>)

「法寶新聞」（11月29日付）は、11月26日に、曹溪宗・社会労働委員会の実践委員の僧侶をはじめ、曹溪宗の僧侶100名が「光化門5次ろうそく集会」に参加したと報じた。嘘は真実に勝てないと書かれた垂れ幕を筆頭に、曹溪寺から出発し、蓮華を持って行進した。

(<http://www.beopbo.com/news/articleView.html?idxno=95407>)

^{ムードン}
「巫堂（シャーマン）崔順実が国を滅ぼした」という噂が流れたことで、巫堂の団体からも批判が出た。今回のことで、真の巫堂の名誉が毀損されたとして、巫俗人（シャーマン）の団体である韓国巫神教総連合会は10月31日に「崔順実には巫俗人という修飾語をつけないでく

れ」と署名運動を行い、巫俗人 800 人が署名した。なお付け加えると、巫俗人という言葉は、巫堂という言葉に蔑視するニュアンスがあるとして、代わりに使用されるようになった言葉だが、一般には巫堂の方が広く使われる。

韓国巫神教総連合会の李ウオンボク^{サ イ ヒ}総裁は、「様々な疑惑に関わっている崔氏に巫堂という修飾語が付くことで、巫教が似而非宗教のように思われ罵倒されている」「わが民族の文化遺産を守って継承しているという自負心を持って生きている巫堂に対する名誉棄損だ」とした。崔氏が自ら巫堂ではないと明らかにしないなら、全国の巫俗人はデモ行進に参加すると述べた。崔氏の巫堂説が広がったのは、似而非宗教として知られている霊世教の教祖である崔太敏氏が生前、「娘の順実が現夢（死んだ人や神霊が夢に現れる）や霊的能力を持っている」と言ったからである。また朴大統領の就任式の際に崔氏の指示によって使われたとされる福袋の「五方囊」^{オバンナシ}の存在と、「八仙女」の集まりが崔氏と関連があるという疑惑によってより拡散した（「朝鮮日報」11月4日付）。

この五方囊については、東洋思想の五行論に従って青（東）、赤（南）、黄（中央）、白（西）、黒（北）の5つの色の錦で作った伝統的な袋で、福を祈願するお守りを入れる袋として使われる。崔氏のタブレット PC にこの五方囊の写真があったが、就任式で使われたものは五色の配置が間違っていることも物議を醸した。宇宙の気運を集めるためのお守りのような呪術的な意味で使ったのではないかという推測も出ている。

（アジア経済 10月27日）

<http://www.asiae.co.kr/news/view.htm?idxno=2016102709342496489>

八仙女の集まりは、崔氏を含む財・政・官の有力人事 8 人の女性で形成されたもので、秘かに定期的に会合を開き、組織的に国政に関与したのではないかという疑惑がある（「連合ニュース」10月27日付）。

2. 関わりがあると報じられた宗教

父親が新興宗教の創始者だった崔氏に朴氏が精神的に操られているとの見方が韓国社会に広がり、「宗教を介して近づいてきた女性に、国政を操られたのではないか」と世論の怒りに拍車がかかった。「中央日報」の11月1日のコラムでは、「シャーマニズム（呪術的）政治にこれ以上惑わされないよう、不正な権力を解剖しなければならぬ」と一連の疑惑を強く批判した。これに対し、朴氏は11月4日の国民向け談話で、「私が似而非宗教にはまったとか、大統領府でおはらいの儀式をしたという話まで出ているが、決して事実ではないと明確に申し上げる」と自らこの話題を持ち出した上で、完全否定した（読売 11/5 ほか）。

朴氏と崔家の人との関係はいつから始まったのか。崔太敏氏は仏教の僧侶になったり、カトリックの洗礼を受けたりし、また7度も名前を変更。6人の妻との間に9人の子どもがいた。70年代に、仏教とキリスト教を融合した新興宗教を設立し、主宰していた。「国民日報」（電子版）によると、朴槿恵氏は1974年、母の陸英修氏^{ユクヨンス}が朴正熙大統領暗殺未遂事件の際の凶弾に倒れたことで精神的にひどく落ち込んでいた頃、太敏が慰めの手紙を送った縁で、初めて面会した。太敏は「陸英修の魂が乗り移った、と言って表情と声を再現したら、朴槿恵は驚いて気絶した」と面会の様子を知人に説明したという（東京 11/12 ほか）。74年に大学生であった崔順実を朴に引き合わせたのも太敏である。青瓦台（大統領府）に出入りできるようになった太敏を詐欺や横領などの常習犯だとつかんだ中央情報部（KCIA）関係者が、朴正熙大

統領に距離を置くべきだと進言したこともあった。朴槿恵氏を心配する妹と弟は「お姉さんがだまされているので早く救出してください」と当時の盧泰愚大統領に手紙で訴えたこともあった。しかし、朴槿恵氏は「崔牧師様は私を絶えず助けてくれた」「社会に役立つ仕事をしようという気持ちにあふれていて私心のない方だ」と絶大な信頼を寄せていた。79年に朴正熙大統領が側近に暗殺され、98年に朴槿恵氏が国会議員に出馬を決めるまで約20年にも及ぶ「沈黙の時間」を崔父娘が支えた。朴氏の国会議員時代には、崔氏の夫である鄭潤會が秘書室長を務めた(日経12/1ほか)。

崔太敏氏が作ったという新興宗教については、永生教、^{ヨンセンギョ}霊世教あるいは永世教^{ヨンセギョ}だという情報が入り混じっている。「国民日報」(11月21日付)は、基督教大韓聖潔教会が崔太敏氏の実態を分析した報告書をまとめ、所属全国教会に発送すると報じた。崔順実国政介入事件で韓国教会が混乱しているため、今回の事件のキリスト教的な意味を整理し、教団内で配布するという。

崔太敏氏報告書の一部を紹介する。太敏が1973年に霊世教(天父教から派生し、曹熙星が創立した「永生教ハナニムの聖会勝利祭壇」とは別のもの)を創立し、自分をウォンザキョン、^{アジョン}勅使、テザママと呼ばせ、ソウルと大田で難病を治療する行為を行った。「大田日報」(1973年5月13日付4面)には<霊世界からのお知らせの言葉>というタイトルの8cm広告が掲載されている。実際、この日の行事には患者と溪龍山周辺の新興宗教の教祖と巫俗人などが数十名集まった(「現代宗教」1988年6月号)。その内容はおおよそ次の通りである。

「霊世界の主である造物主が送りだした勅使がここにいらっしゃって、数千年間叶わなかった、願い続けてきた仏教の教え、基督教の聖霊降臨、天道教の人乃天、このすべてを造物主からいただいた造化で実践してみせる。みな参加して勅使の造化を目の当たりにしてください。難治病に苦しんでいる方、現代医学で解決できない難病患者とすべての災難で苦しむ方は相談してください」。

その後、7月に配布されたチラシには、崔太敏自身を造物主の使者として神格化する内容があったという。

「韓国日報」(10月27日付)の報道によると、霊世教という教団について学界では、実態すら虚像にすぎないとみている。2016年7月に出版された国内900余の新宗教、異端の情報を網羅した『韓国新宗教大事典』の編者である圓光大学の^{キムボンチョル}金洪喆名誉教授は、教勢どころか正式な教理、印刷物、信徒、規模などの根拠が全く無く、崔太敏氏が個人で少し活動をしたということしか関連事実がないため、一つの宗教団体としては執筆していない。また宗教界で永生教として知られている教団は、曹熙星が1981年に設立した永生教ハナニムの聖会であり、崔太敏氏が教祖で活動していた集団とは名前が同じであるだけだと説明する。

このように実態が明らかでない宗教団体の創始者の娘が、大統領の言動に大きな影響を与えていたかもしれないという疑惑に対し、韓国宗教界の多くや韓国人一般が、憤りや怒りを表明したのは当然だと思われる。

[文責：李和珍]